Japanese Urological Association

PP-105 再燃前立腺癌に対する抗アンドロゲン剤交替療法の有用性

慶應義塾大学医学部泌尿器科
武田　利和，中島　淳，菊地　栄次，宮嶋　哲，
中川　健，大東　貴志，大家　基嗣

【目的】前立腺癌に対する1次内分泌療法の効果は非常に高いが、いずれ再燃する。本研究においては、再燃症例に対する治療として行われる抗アンドロゲン剤交替療法の有用性について検討した。【方法】病理学的に前立腺癌と診断され、1次内分泌療法後に再燃したstageC:14例、stageD:56例を対象とした。年齢は72±3歳（46～86歳)、PSA値は612±180ng/mlであった。1次内分泌療法は全例にLH-RHアゴニストに抗アンドロゲン剤を併用するMABを施行した。また、PSAが3回上昇した場合を再燃とし、全例で抗アンドロゲン剤を変更した。奏効期間は治療開始時から再燃までの期間とし、効果はPSAが50%以上低下した場合を有効とした。【結果】2次内分泌療法の効果があったのは28例であった。2次内分泌療法有効例と無効例においてnadir値、nadirまでの期間、1次内分泌療法の奏効期間に有意な差を認めた。しかし、年齢、治療開始時PSA、stage、Gleason score、組織学的分化度については両者の間で有意な差は認められなかった。【結語】進行性前立腺癌において、1次内分泌療法後のnadir値、nadirまでの期間、ならびに奏効期間が2次内分泌療法の有用性と関連することが示唆された。

PP-106 再燃前立腺癌に対するDocetaxel療法の検討

獨協医科大学越谷病院泌尿器科[1)]，安田泌尿器クリニック[2)]，越谷泌尿器科医院[3)]
八木　宏[1)]，佐藤　両[1)]，芦沢　好夫[1)]，狩野　宋英[1)]，
新井　学[1)]，岡田　弘[1)]，安田　耕作[2)]，鈴木　徹[3)]

【目的】再燃前立腺癌に対してDocetaxelを用いた内分泌化学療法を施行し、その有効性と有害事象につき検討した。【対象】MAB療法後再燃を認め、AWSの有無を確認した内分泌療法抵抗性前立腺癌10例を対象とした。年齢は65－80歳(中央値71)、本療法開始時のPSA値は2－3300ng/ml(中央値451)であった。【方法】Estramustine 560mg/day、Dexamethasone1.0mg/day連日経口投与に加え、Docetaxel50mg/m^2を3週間に1回点滴静脈内投与を1コースとした。初回導入は入院で行い、以後外来にて継続した。【結果】施行コースは2-13コース(中央値5)、PR4例、NC5例、PD1例であった。全身倦怠感のため1例治療を中止したが、その他grade3以上の重篤な有害事象は認めなかった。【結論】再燃前立腺癌に対するTaxan系抗癌剤を用いた化学療法は、副作用が軽微で外来で投与可能な化学療法と思われた。有用性に関してはDocetaxelの投与量などを含め今後の検討が必要である。

PP-107 内分泌不応性前立腺癌に対するドセタキセル療法の検討

杏林大学泌尿器科
桶川　隆嗣，榎本　香織，村田　憲彦，林　建二郎，
板谷　直，多武保　光宏，野田　治久，藤森　雅博，
宍戸　俊英，奴田原　紀久雄，東原　英二

【目的】内分泌不応性前立腺癌に対してドセタキセル療法を行い、その効果および副作用の検討を行った。【対象と方法】対象は内分泌不応性前立腺癌と診断された8例である。全例MAB療法後再燃を認め、AWS症候群の有無を確認後、エストロゲン療法およびデキサメサゾン療法の治療を行いさらに再燃した症例である。患者の年齢は56歳～76歳(平均67歳)、治療開始時のPSA値は18.9～760 ng/ml（平均167）であった。診断時のstageはD1:2例、D2:6例であり、Gleason scoreは4+4=8:4例、4＋5=9:2例、5＋4=9:1例. 5+5=10:1例であった。ドセタキセル60mg/m^2を4週間毎に外来で施行した。【結果】6症例(75%)においてPSA減少を認め、2症例(25%)に50%以上のPSA減少を認めた。この2症例は3コース終了後であった。有害事象として2症例(25%)にGrade3の好中球減少を認め、G-CSF製剤投与し速やかに回復した。入院でG-CSF製剤を投与したが、他に重篤なものはなかった。【考察】本治療法は内分泌不応性前立腺癌に対して有効な治療法である。副作用も比較的軽度であり、外来化学療法として有用であると考えられた。

PP-108 ホルモン抵抗性前立腺癌に対するドセタキセル療法の検討

群馬大学大学院泌尿器病態学
小池　秀和，中里　晴樹，新井　誠二，関根　芳岳，
曲　友弘，松井　博，山本　巧，柴田　康博，
羽鳥　基明，伊藤　一人，鈴木　和浩

【目的】ホルモン抵抗性前立腺癌に対しドセタキセル療法を行い、有効性、安全性の検討をおこなった。【方法】対象は9例(骨転移のみ3例、リンパ節転移のみ3例、骨＋肺転移3例)、年齢は53-76歳（平均68歳)。前治療で、MAB療法、デキサメタゾンなどによる第2次、第3次療法を受けている。原則としてドセタキセ60mg/m2をday 1での投与とし、原則的に3週間ごとに投与した。【結果】50%以上のPSA減少を認めたものは、3コース終了後で5例(56%)、PSA値がnadirとなった時点では8例(89%)であった。全体の奏効期間は8.4ヶ月で、骨＋肺転移の1例は肺転移の消失、骨痛の消失を認め24ヶ月間再燃をきたさず経過、またリンパ節転移のみの1例はリンパ節の縮小を認め16ヶ月間再燃をきたさず経過するなど長期奏功例も存在し。有害事象として4例に好中球減少(G3)にてG-CSF製剤を使用したが、他に重篤なものはなく、入院で導入を行なった後は全例外来で投与可能となっている。【考察】再燃前立腺癌に対するドセタキセル投与の近接効果は高く、中には長期にわたり効果の持続をしめす場合もある。また副作用も骨髄抑制以外は比較的軽度であり、ホルモン抵抗性前立腺癌に対する化学療法として有用と思われる。

NII-Electronic Library Service